外部からやってくる「徴証（しるし）」を寄せつけまいとするように、我々は甲冑で身を固めている、というマルチン・ブーバーのテーゼについて

担当：池田光穂

われわれは誰もみな、甲冑で身をかためていて、われわれにむかつて生ずる徴証（しるし・サイン：Zeichen）を寄せつけまいとしている。徴証（しるし）はわれわれにむかつて絶えず生じている。生きているということは、語りかけられているということであり、われわれにとって必要なのは、ただ、その徴証（しるし）に向かい立って、それを聴くということであろう。だがこの冒険は、われわれには危険すぎる。音なき雷は破滅への恐れによってわれわれを脅かすようにおもわれる。だからわれわれは、時代から時代へと、われわれの防禦装置をますます無欠にしてゆくのである。あらゆるわれわれの知識は、われわれに請け合って言う、《安心しているがよい、すべては起るべき道理によって起きている、しかし何ごとも特にきみにたいして仕向けられているわけではない……きみが指目（しもく）されているのではない。〈世界〉というものは、まさしくこのようなものなのだ、きみはきみの欲するままに世界を体験することができる、しかしきみがきみの心のなかで世界をどのようなものとして想いえがこうとも、すべてはきみのうちからのみ立ちあらわれてくることなのだ。きみには何も要求されてはいない、きみは語りかけられたりはしない、……世界におけるすべてのことは無言なのだ》

われわれは誰もみな、甲冑で身をかためながら、やがてはそれに馴れっこになり、もうそのことを感知せぬようになっている。ただ時おり、その甲冑を貫きとおして、魂をかきたてて敏感にするような瞬間があるだけなのだ。そしてこのような瞬間に見舞われると、われわれは注意深くなって、自問する、《いったいいま起ったのは特別なことだったのだろうか？　このようなことに実は毎日、私は出会っているのではないのか？》と。そうしてわれわれは、みずからの問いに答えて言いもしよう、《たしかに、何も特別なことが起ったのではない、このようなことは毎日おこっているのだ……ただわれわれがいつもその場に居合わせてはいないだけなのだ》と。

語りかけとしての徴証（しるし）は、何か並外れたもの、物事の秩序からはみ出しているようなものなのではない。それはつねに生じているもの、ごく普通にこそ生じているのであって、その語りかけを通して何かが特にあらたに到来するわけではない。エーテルの波はつねにうち寄せている。だが、われわれはたいていの場合、われわれの受信機を停止させているのである。

私に迫ってくるものは、私にたいする語りかけである。世界の現象は、私に迫ってくるものであることによって、私にたいする語りかけである。私に迫ってくるものを、私はただそれを去勢し、それを語りかけではないものへと無力化することによってのみ、この私を指目（しもく）しているのではない世界現象の一部分としてとらえることができるのだ。あの、すべてのものをただそのなかへ組みいれられることをのみ要するものと化している、整然たる、去勢された体系は、実に人類の巨怪な業（わざ）である。そして言語もむろん、その用に供せられたのである。

【出典】

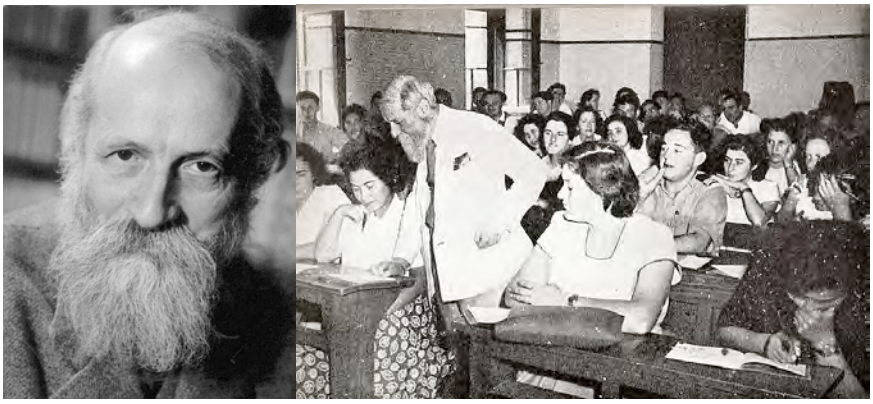
マルチン・ブーバー「対話」『ブーバー著作集 1 』田口義弘訳、Pp.202-204、東京：みすず書房、1967 年

問い：

１．ブーバーが主張する「われわれ」とはいったいどのような存在なのか？

２．ブーバーは、この「われわれ」が置かれた状態を〈よし〉としているのか？　それとも、なにか「われわれに」みずからの〈変化〉を促そうとしているのか？

３．ブーバーの主張について、これを読んだ君は首肯（しゅこう：肯定すること）できるか？そうである場合は、さらに彼の主張を補強する意見を付け加えてほしい。また何らかの異論があればそれに対する反論や疑問を考えてみよう。



Martin Buber, 1878 ,מרטין בובר-1965

【メモ】